

前4世紀アテナイ社会における亡命者の実態

—外国人自身の碑文を手がかりに—

篠原道法

はじめに：外国人流入の要因としての経済と政治

アテナイが位置するアッティカの地には、古典期に経済的な目的で各地から多くの人々が訪れ、彼らはしばしばここを拠点として活動した¹⁾。とりわけ、前5世紀には、対ペルシアの海上同盟であるデロス同盟（前478-前404年）において、また前4世紀前半には、対スパルタの海上同盟である第二次アテナイ海上同盟（前378-前355年）において、アテナイが主導的／支配的な役割を果たしていた事実は注目に値する。その海軍力によりもたらされた海上における一定の安寧は、主要港であるペライエウスへと各地の交易商を誘ったと考えられる²⁾。

前4世紀中葉以降も、取り巻く状況は変わるものの経済が多くの人々をアテナイへと引き付けた。50年代にビュザンティオンやロドスなどの離反により勃発した同盟市戦争（前357-前355年）や、30年代の対マケドニア戦争であるカイロネイアの戦い（前338年）での敗北を通じて、アテナイは坂道を転がり落ちるかのように対外的な影響力を失ってゆく。だが、敗北に伴う財政難や穀物供給の不安定化に対応するために、50年代から40年代にかけてはエウブロスの、また30年代から20年代にかけてはリュクルゴスの主導により財政改革が実施される。こうした状況下において、市民と外国人が同等の立場で関わる短期結審の取引関連訴訟（ディカイ・エンポリカイ）の成立や港湾の整備、財政・穀物供給に貢献した外国人に対する顕彰など、有用な外国人と関係を構築し、また彼らをアテナイへと呼び込むための様々な政策が実施されたのである³⁾。

かかる政策の結果、実際に多くの交易商がアテナイと関係を持ちまた拠点を設けていたことは、デモステネスの名で伝わる取引関係の訴訟にかんする弁論に多くの外国人が交易に携わる者として登場する事実から推測される。これに関連して、著者は以前に、外国人墓碑に記されたエトニコン（出身地名）の数量的分析を通じて、前4世紀中葉以降に、アテナイから見て北東に位置する地域—エーゲ海北岸・黒海沿岸—や、南に位置する地域—クレタ・小アジア南岸・キュプロス・フェニキア・メソポタミア・アラビア・北アフリカ沿岸—といった取引に関連する地域出身者が、アテナイ側の政策に応じるかのように、実際にアッティカの地に流入・定着したと十分に考えられることを指摘した⁴⁾。

1) Cf. B. Akrigg, *Population and Economy in Classical Athens*, Cambridge: Cambridge University Press, 2019, pp. 120ff.

2) ペライエウスについては、師尾晶子「古代ギリシアの通商都市—アテナイの双子都市ペライエウス」神崎忠昭ほか編『地中海圏都市の活力と変貌』慶應義塾大学出版会、2021年、231-245頁を参照。

3) Cf. A. Moreno, *Feeding the Democracy: The Athenian Grain Supply in the Fifth and Fourth Centuries BC*, Oxford: Oxford University Press, 2007; D. T. Engen, *Honor and Profit: Athenian Trade Policy and the Economy and Society of Greece, 415-307 B.C.E.*, Ann Arbor: University of Michigan Press, 2010; 篠原道法『古代アテナイ社会と外国人—ポリスとは何か』関西学院大学出版会、2020年、189-191頁（以下、篠原（2020）と略）。

4) 篠原（2020）、223頁。

これまでに述べてきたように、アテナイへの外国人の流入の大きな要因としては経済活動が想定されるが、これはあくまで要因の一つに過ぎず、外国人流入の実際の背景はより複雑であったことは容易に想像される。様々に想定される要因のうち本稿において著者が注目したいのは、ギリシア本土とその周辺政治情勢の変化に伴って生じた亡命者の存在である。特に前4世紀中葉以降には、各地の内乱や外国一主としてマケドニアによる侵略などの影響で亡命者が頻出し、次章で言及するように、文献史料から実際に多数の亡命者がアッティカの地へと流入していたことが知られている。それゆえに、同時期のアテナイ社会における外国人の問題を考えるうえで、彼らの存在を無視することはできないのである⁵⁾。

亡命者に関しては、ザイベルトの包括的な研究も含めて現在に至るまでに研究の蓄積がある⁶⁾。だが、アテナイにおける亡命者の実態—彼らの社会への流入や社会での活動の実情—については、亡命者の思いや行動を具体的に物語っている史料の少なさもあって、必ずしも十分には研究されていない。

そこで本稿では、亡命者が頻出した前4世紀に焦点を当て、また主として外国人自身が残した碑文を手がかりに、アテナイにおける亡命者の実態についてひとつの可能性を示したい。これを通じて、経済に注目するだけでは見えてこないアテナイ社会における外国人の動向の一端を示すことを、本稿の目的とする。

第1章 アテナイへの亡命者の流入の実態

1. 墓碑が示す可能性

本章では、外国人墓碑に記されたエトニコンを手がかりに、亡命者の社会への流入の実態に迫る。ただし、墓碑には被葬者が亡命者であることを明示する事例がないことには注意が必要であろう。とはいえ、亡命者が生じるような政治的混乱が生じた地域の出身者の名前が当該時期以降の墓碑に頻繁に登場するならば、そこに亡命者の存在の一定程度の影響を読み込むことは十分可能であるように思われる。実際に、特定の地域の政治的混乱と墓碑に表れる当該地域出身者の数との間に相互関係を確認できるケースが多数する。以下では、こうしたケースを取り上げて説明を加えたい。

2. ケーススタディ

(1) テバイ、ボイオティア連邦の場合

前4世紀初頭、テバイは、アテナイやアルゴス、コリントスなどと手を組み、ペロポネソス戦争(前431-前404年)での勝利によりギリシア世界において覇を唱えていたスパルタに対抗した。その結果コリントス戦争(前395-前387年)が生じるに至ったが、前387年のアンタルキダスの和約により

5) 同上、223-224頁。

6) E.g. J. Seibert., *Die politischen Flüchtlinge und Verbannten in der griechischen Geschichte*, 2 vols., Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1979 (以下、Seibert (1979) と略) ; ポール・マケクニー『都市国家のアウトサイダー—ポリスから古代帝国へ』向山 宏訳、ミネルヴァ書房、1995年(原著:1989年)、19-40頁、B. Gray, *Stasis and Stability: Exile, the Polis, and Political Thought, c. 404-146 BC.*, Oxford: Oxford University Press, 2015; L. Rubinstein, "Immigration and Refugee Crises in Fourth-Century Greece: An Athenian Perspective", *The European Legacy* 23 (1-2), 2018, pp. 5-24.

ギリシアにおけるスパルタの覇権が確立した。その後の前 382 年には、スパルタ軍はテバイを急襲して城砦を占領し、そこに守備隊を駐留させることになる。この際にテバイの多くの民衆派が亡命したのだが、対スパルタを意識してかアテナイは彼らを積極的に受け入れたことが知られている⁷⁾。

表の「テバイ」の欄にみられるように、この亡命が生じた前 4 世紀前半にはテバイ人の墓碑をアテナイで 5 例確認することができる⁸⁾。それ以前には彼らの墓碑をまったく確認できない事実を踏まえるならば、前 4 世紀前半におけるテバイ人の墓碑の登場の背景として当該時期の何らかの出来事を想定する必要がある。そのひとつとして、前 382 年におけるスパルタのテバイ占領に伴う民衆派の亡命を想定することは可能であろう。少なくとも、この事件を含め前 4 世紀初頭からスパルタに対抗する中で小競り合いが繰り返されて政治的に不安定な状況が続いていたため、対スパルタで友好関係にあったアテナイに多くのテバイ人が身を寄せた結果が、前 4 世紀前半における彼らの墓碑の登場には反映されているとする考えは十分成り立つように思われる⁹⁾。

続いてテバイの政治的混乱として注目されるのが、前 338 年のカイロネイアの戦いでアテナイやテバイを中心としたギリシア連合軍がマケドニア軍に敗北したこと、そして前 335 年に、マケドニアのアレクサンドロス大王に対するテバイを中心とした反乱が失敗に終わり、テバイが徹底的に破

表：政治的混乱が生じた地域出身者の墓碑の時期傾向ーアッティカ
(前 5 世紀後半～前 4/3 世紀の世紀転換期)

※当該地域で政治的混乱が生じた時期に網掛けをした(その詳細は、本文参照)

※一つの墓碑に複数の出身地名が登場する場合には、それぞれを1つの事例としてカウントした

	5c 後半	5/4c	4c 前半	4c 中葉	4c 後半	4/3c
テバイ	0	0	5	7	4	2
ボイオティア	0	0	0	0	3	0
プラタイア	2	0	1	4	2	0
ヘラクレイア	0	0	1	4	9	1
オリュントス	0	1	2	6	4	1
フォキス	0	0	0	0	2	0
フェニキア+キュプロス	0	2	7	2	9	1
外国人墓碑の事例総数	13	54	87	118	150	26

7) Aisch. 2.164. なお本稿では、史料集および古典作家とその作品の略号略は、S. Hornblower and A. Spawforth (eds.), *Oxford Classical Dictionary*, Fourth Edition, Oxford: Oxford University Press, 2012 に従った。

8) *IG II²* 8866, 8871, 8880, 8883, 8886.

9) スパルタによるテバイ占領の3年後である前 379 年にはエパミノンダスやペロピダスに率いられた民衆派がテバイからスパルタの守備隊を追い出して民主政を復活しており、亡命は比較的短期間であった。それにもかかわらず前 4 世紀中葉でもテバイ人の墓碑を 7 例 (*IG II²* 8856, 8862, 8863, 8873, 8885, 8891, 8893) 確認できる。その要因としては、前 381 年のスパルタによるテバイ占領以前から非戦闘員のテバイ人が多数アテナイに避難しており、彼らがそのまま定着したことを想定するのが、より適切であるように思われる。

壊されたことである。その結果テバイ人は再び亡命を余儀なくされたが、このときもアテナイは彼らを受け入れてアテレイア（免税特権）を与えている¹⁰⁾。前4世紀後半以降もテバイ人の墓碑を確認できるが¹¹⁾、同世紀中葉と比べて増加傾向は見られず、そこから亡命者の影響を読み取ることは難しい。

だが、この時期には「ボイオティア人」名義の墓碑が初めて3例登場する点に注意したい（表：「ボイオティア」の欄）¹²⁾。ボイオティアはテバイの所在地域であり、テバイを盟主としてボイオティア連邦を形成していたが、前338年のカイロネアの戦い後に混乱をきたして多くの亡命者が生じ、アテナイは彼らを多数受け入れていた¹³⁾。こうした事実が、前4世紀後半におけるボイオティア人墓碑の登場に反映されている可能性は十分にある。

(2) プラタイアの場合

次に、プラタイア人のケースについて確認しよう。アテナイと同盟関係にあったプラタイアは、ペロポネソス戦争初期の前429年にスパルタ軍の包囲を受けて、前427年ついに陥落する。アテナイは多くのプラタイア人を亡命者として受け入れて、一部制限付きではあるものの市民権を一括付与している¹⁴⁾。表の「プラタイア」の欄にみられるように、当該時期である前5世紀後半には、事例数は決して多くないが2例のプラタイア人墓碑を確認でき、またそのうちのひとつには多数の戦没したプラタイア人の名前が刻まれている点に注意したい¹⁵⁾。

その後プラタイア人の多くは祖国に帰還するが、前4世紀前半にもプラタイアでは政治的な混乱が生じている。前373年には、プラタイア人はテバイによってボイオティアの地から再び追い出されており、亡命の憂き目にあったプラタイア人のうち少なからぬ者たちがアッティカの地に流入し、アテナイ側も以前に付与した市民権の再確認をする形で彼らを受け入れている¹⁶⁾。かかる状況を反映するかのよう、この出来事が生じてからしばらく経た前4世紀中葉には、一時期減っていたプラタイア人の墓碑が4例と再び増加している（表：「プラタイア」の欄）¹⁷⁾。

(3) 黒海沿岸のヘラクレイアの場合

黒海沿岸に位置するヘラクレイアはアテナイにとって穀物供給の重大拠点であり、こうした状況を背景として、経済目的で多くのヘラクレイア人交易商がアテナイを訪れていたと考えられる。

しかしながら、ヘラクレイアもまた政治的混乱とは無縁ではなかった。前364年には同国の有力者クレアルコスが仲間のミトリダテスから提供された強力な傭兵隊を引き連れてヘラクレイアの全

10) Aisch. 3.156–157; Diod. 17.15.4; Harpokration s.v. 'isoteles.'

11) 前4c後半: IG II² 8532a (=8855), 8889a; ΣΕΜΑ (B. N. Μπαρδάνη και Γ. Κ. Παπαδόπουλος, Σμπλήρωμα των Επιτύμβιων Μνημείων της Αττικής, Αθήναι: Εν Αθήναις Αρχαιολογική Εταιρεία, 2006) 1136, 1139. 前4/3c: IG II² 8858, 8867.

12) IG II² 8415, 8419, 8421.

13) Aisch. 2.142–3.

14) [Dem.] 59.104.

15) IG I³ 1362, 1363. 複数のプラタイア人の名前を確認できるのは、後者の事例である。

16) Xen. Hell. VI.3.1 ff.; Isoc. 14.

17) 前4c前半: IG II² 10092. 前4c中葉: IG II² 10090; ΣΕΜΑ 1391, 1393, 3192. 前4c後半: IG II² 10096; ΣΕΜΑ 200.

権掌握をもくろみ、最終的にヘラクレイアで僭主政が成立した。ヘラクレイア人のうち多数の民衆派とその家族は亡命し、彼らの亡命生活は前3世紀前半の孫の代まで続いたという¹⁸⁾。

アテナイでは、当該時期である前4世紀中葉から同世紀後半にかけてヘラクレイア人の墓碑が明らかに増えている(表:「ヘラクレイア」の欄)¹⁹⁾。「はじめに」でも述べたように、同時期にはアテナイで外国人誘致政策がとられており、ヘラクレイア人の墓碑の増加の一因はそれであろう。また、穀物供給の不安定化につながることを懸念してか、アテナイによるヘラクレイア人亡命者の受け入れを明示する史料が存在しない点にも注意が必要である。

だがやはり、前4世紀中葉以降のアテナイにおけるヘラクレイア人の墓碑の増加のもうひとつの要因として、前364年のヘラクレイアにおける政変の影響を想定する必要があるように思われる。僭主と直接対峙し亡命した民衆派とその家族はもちろんのこと、直接的に僭主と対峙しないまでも、政治的な混乱によって不安定になっている祖国からアテナイに拠点を移したヘラクレイア人の交易商がいても不思議ではないだろう。

(4) オリュントスの場合

前350年代にフィリッポス二世の下で北エーゲ海において勢力を拡大していたマケドニアはカルキディケ半島にも手を伸ばし、その最大のポリスタるオリュントスも攻撃の対象となった。アテナイも数度援軍を送ったが、前348年にはついにオリュントスは陥落しその都市部は徹底的な破壊を受けた。

この状況下においてオリュントスから大量の亡命者が生じ、アテナイもアテレイアを付与する形で彼らを積極的に受け入れた²⁰⁾。表の「オリュントス」の欄にみられるように、当該時期である前4世紀中葉に、アテナイでオリュントス人の墓碑が著しく増加しており、同世紀後半においても中葉ほどではないが継続的に事例を確認できる²¹⁾。こうした墓碑の増加にオリュントス陥落に伴う亡命が影響しているとみなすことは、十分に可能であろう。

(5) フォキスの場合

前346年、マケドニア王フィリッポス二世も介入した第三次神聖戦争(前356-前346年)において敗北したフォキスの居住地は破壊を受け、多くのフォキス人が亡命をした。そして、アテナイにも多数のフォキス人亡命者がいたことが知られている²²⁾。

当該時期である前4世紀中葉には、事例は2例にすぎないもののフォキス人の墓碑をアテナイで

18) S. M. Burstein, *Outpost of Hellenism: The Emergence of Heraklea on the Black Sea*, Berkley, Los Angeles and London: University of California Press, 1974, pp. 51-54; Seibert (1979), p. 140; cf. Isoc. *Ep.* 7.

19) 前4c前半: *IG II²* 8593. 前4c中葉: *IG II²* 8612, 8708, 8725, 8751. 前4c後半: *IG II²* 8550, 8551, 8572a, 8573, 8636, 8683, 8700, 8755, 8792. 前4/3c: *ΣEMA* 1090.

20) Dem. 19.146; Aisch. 2.154-155; Harpokration s.v. 'isoteles.'

21) 前5/4c: *IG II²* 10029 (=12366?). 前4c前半: *IG II²* 10019; *SEG* 56.274. 前4c中葉: *IG II²* 10018, 10020a, 10024, 10025, 10028, 10026 (=12271). 前4c後半: 10017, 10020, 10023; *CAT* (C. W. Clairmont, *Classical Attic Tombstones*, 9 vols., Kilchberg: Akanthus, 1993-1995) 1.436. 前4/3c: *ΣEMA* 1382.

22) Dem. 5.18-19; Aesch. 2.142-143.

確認することができる(表:「フォキス人」の欄)²³⁾。前4世紀中葉より前にはフォキス人墓碑をまったく確認できない事実を踏まえるならば、この時期における当該墓碑の登場の背景には前346年におけるフォキス人の亡命があったと考えてよいだろう。

(6) フェニキア、キュプロスの場合

フェニキアやキュプロスも、外国の王の影響でしばしば政治的に混乱をきたした。前4世紀中葉には、ペルシア王アルタクセルクセス3世がエジプト遠征に失敗した後、シドン王が反乱を企てるものの失敗して都市は破壊を受けることになる²⁴⁾。その後アルタクセルクセス3世は、フェニキアやエジプト、キュプロスへの支配を強めるようになり、この時期、当該地域で政治的に不安定な状況が続いた。また前330年代末には、フェニキアはマケドニア王アレクサンドロス大王の侵攻を受けて、ペルシアに代わってマケドニアの支配を受けることとなった²⁵⁾。

このように政治的に不安定な状況が続く中で、前4世紀中葉から後半にかけて、アテナイにおいて当該地域出身者の墓碑はいかなる傾向を示しているのだろうか。表の「フェニキア+キュプロス」の欄にみられるとおり、フェニキアやキュプロスの出身者の墓碑は前5世紀と前4世紀の世紀転換期より継続的に確認され²⁶⁾、この頃からアテナイを拠点に彼らが交易商として活動していたことが推察される。他方で、当該地域出身者の墓碑は前4世紀中葉にいったん減少傾向を示すが、同世紀後半に一転して急増している²⁷⁾。

前4世紀後半には、「はじめに」で述べたとおり、リュクルゴスによる財政改革のもとで外国人誘致政策が行われており、例えば、キュプロスのキティオン人商人のコミュニティに対して、信仰の拠点の確保を目的としたエンクテシス(土地所有権)が付与されている²⁸⁾。もちろん、こうした政策の影響も考慮する必要があるが、橋本が指摘するように²⁹⁾、フェニキアやキュプロスの政治的な不安定さもまた、当該地域出身者がアテナイに活動の拠点を移すに至った大きな要因のひとつであり、それが前4世紀後半の彼らの墓碑の増加という結果につながったと考えることはできよう。

これまで、外国人墓碑を手がかりに、政治的な混乱が生じた地域出身者のアテナイへの流入について検討してきた。墓碑を残した当事者が亡命者であったと断定することはできないものの、政治的な混乱が生じた時期以降に当該地域出身者の墓碑がアッティカの地で増加している、すなわち当該地域出身者の多くがアテナイに流入したことは明らかである。かかる当該地域出身者の流入に、政治的な混乱に伴う亡命が少なからず影響していた可能性は十分にあるように思われる。

23) *IG II²* 10494, 10496.

24) *Diod. Sic.* XVI.40-65.

25) *Idem.*, *IVII.40-47*.

26) 前4c: *IG II²* 9031; *ΣEMA* 1452. 前4世紀前半: *IG II²* 9036, 9119, 10376, 11933?; *SEG* 51.284; *ΣEMA* 1185, 1417.

27) 前4c中葉: *IG II²* 9284, 10382. 前4c後半: *IG II²* 8388, 9032, 9034, 9035, 9084, 9120, 10270; *ΣEMA* 844, 1163; *SEG* 62.120.

28) *IG II³* 1, 337 (前333/2年).

29) 橋本資久「アテナイにおける他者認識—古典期における「地政学的遠隔地」出身者への顕彰を巡って」桜井万里子、師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム—空間・ネットワーク・文化の交錯』山川出版社、2010年、109-135頁、126頁。

第2章 前4世紀アテナイ社会における亡命者の活動の実態

前章で指摘したように、各地での政治的混乱は、実際に少なからずアッティカの地への外国人の流入に影響を与えたと考えられる。それでは、アテナイに流入した彼らは、社会の中でどのように活動していたのだろうか。

祖国の地と比べれば、彼らの生活は困難に満ちていたことは容易に想像される。前373年にテバイによって再び祖国から亡命する運命を被ったプラタイア人がアテナイの民会で行ったという設定でイソクラテスが書いた演説において、話者であるプラタイア人は、「親が老後の世話を満足に受けられない」、「子どもは希望どおりの教育に与れない」、「生活のために日雇いの仕事をしなければならない」、「家族が引き裂かれてしまっている」というように、自分たちの窮状を訴えている³⁰⁾。情に訴えるための誇張が表現にあるとしても、こうした亡命者たちが多数いたことは間違いないだろう。

だが実際には、困難な中でもたくましく生きた者たちもいたことを示唆する史料を確認することができる。以下では、集団と個人に分けてこうした亡命者の活動の実態に迫りたい。

1. 亡命者の集団、コミュニティとしての活動

亡命者による集団、すなわちコミュニティの活動としてよく知られているのが、プラタイア人のものである。リュシアスの第23弁論、『パンクレオン告発—プラタイア人ではなかったこと』（前403/2年より後）によれば、原告はパンクレオンが偽のプラタイア人であることを明らかにすべく証拠を探していた際に、プラタイア人たちから次のような情報を得たという。

月の替わり目の日に立つチーズ市に行けば、最も正確なところが分かるのではないか、というのは、毎月その日にプラタイア人たちはそこにより集まることになっているからだ、と教えてくれた³¹⁾。

このようにプラタイア人は亡命先であるアテナイで結束し、市民権を付与されながらも独自のコミュニティとして定期的な集会を行っていたのである。これ以外に亡命者のコミュニティによる具体的な活動を明確に示す史料はないが、プラタイア人のケースは、彼らと同様にしばしば、アテナイに亡命した人々が当該地域毎にコミュニティを形成して結束していたことを示唆している³²⁾。以下では、出身地毎のコミュニティの活動の具体例を確認することを通じて、亡命者の集団としての活動を推察するための材料としたい。

最初に取り上げるのは、キュプロスのキティオン人商人のケースである。前章でも言及したように、次のとおり、彼らに対して信仰の拠点の確保を目的としたエンクテシスの付与が民会で提案・可決されている。

30) Isoc. 14.48-49.

31) Lys. 23.5 (阿部素子訳).

32) 第1章においてアテナイにおける亡命者の存在を示す証拠として取り上げた史料には、しばしば「〇〇人の亡命者たち」というように、亡命者が集団として言及されている点にも注意したい。

〈前略〉ブタダイ区民リュコフォンの〔息子〕リュクルゴスが提案した。キティオン人の交易商がアフロディテ（アフロディテ・ウラニア）の神域を造営するための区画のエンクテシスを求めて法になかった嘆願であると思われる事柄について、民会によって決議されるべし。ちょうどエジプト人がイシスの神域を造営したように、キティオン人の交易商にアフロディテの神域を造営するための区画のエンクテシスを与えるべし³³⁾。

このように、信奉するアフロディテ・ウラニア（＝アシュタルト）信仰の拠点を求め、またそれを認められるほどに、キティオン人たちがひとつのコミュニティを形成して結束し活動をしていたことがうかがえる。

次に注目したいのは、シドン人のコミュニティの活動である。前3世紀のものとしてされているが、彼らの具体的な活動を記した一枚の碑文が存在する。そこには、次のような決議内容が記されている。

《フェニキア語》祭祀の4番目の日、シドン人の民衆の〔暦の〕14年目に、シドン人のコイノン（コミュニティ）によって民会で決議された。MGN（発音は不明）の息子で、神殿とその庭の建物に責任を持つコイノンの監督役であるシャマバルに20ダリウスの金冠によって栄誉を授けるべし。というのも、彼は神殿の庭を再建し、彼に要求されたこと全てを奉仕によって遂行したからである。神殿に責任ある我々の監督役である人々は彫刻を施された碑にこの決議を記し、神殿の柱廊の人目のつくところに設置すべし。コイノンは保護者と呼ばれるべし。この碑文については、シドン人の市民が神殿の基金から20ドラクマを供出すべし。それというのも、コイノンを前にして奉仕を行った者たちに報いる方法をコイノンが分かっているとシドン人が知るように、である。

《ギリシア語》シドン人のコイノンはシドン人ディオペイデスを〔顕彰した〕³⁴⁾。

決議の形式はアテナイの評議会や民会の決議と酷似しており非常に興味深く、そこからはシドン人のコミュニティがアテナイの流儀を受け入れていたことがうかがわれる。このようにアテナイ社会に適応しつつも、フェニキア語の使用が象徴するように、彼らは独自のコミュニティとして活動していたのである。

以上に挙げた二つの事例はそれぞれ、あくまでキティオン人商人とシドン人のコミュニティとしての活動の実態を示しているにすぎないが、前章で言及したように、彼らの出身地では、当該碑文登場以前の時期にあたる前4世紀中葉から、同世紀後半にかけて政治的な混乱が生じていた点に注意したい。これを避けてアテナイに拠点を移した人々は、少なくともアテナイに存在していた出身地のコミュニティを足掛かりとして、社会の中で活動することが可能だったのである。

33) *IG II³ 1, 337.31-45.*

34) *KAI* (H. Donner und W. Rölling, *Kanaanäische und aramäische Inschriften*, 3vols., Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 1962-1964.) 60= Gibson (J. C. Gibson, *Textbook of Syrian Semitic Inscriptions, Vol.3, Phoenician Inscriptions*, Oxford: Clarendon Press, 1983) 42. フェニキア語の訳は、Gibsonの英訳に準拠している。

こうした出身地毎のコミュニティとは別に、出身地の枠組みを超えて集団を形成することもあったようである。その事例として、アソシエーション（ティアソタイとエラニスタイ）の事例を二つ紹介したい。

まずは、宗教的団体であるティアソタイの碑文（前300／299年）である。これには、ティアソタイによる次のような顕彰決議が刻まれている。

ヘゲマコスがアルコンの時。ピュアノプシオン月の5番目の日。ティアソタイの第一集会（アゴラ）。ティアソタイによって決議された。サラミス人レオクラテスの〔息子〕クレオンが提案した。デメトリオスは、クレアルコスがアルコンの時にティアソタイによって書記役に選ばれて、立派かつ正しく公事に配慮し、説明を公正かつ正しく行い、彼が主導した事柄について執務審査を受けて、他の人々に関すること―だれが公事の内の何を指揮したのか―も説明し、今も公私それぞれにわたってティアソタイのために有益なことを行いまた発言し続けており、そしてティアソタイがコイノンから彼に手当を与えるようにと決議した時に彼はこれをティアソタイに返却したので、良き運命のために、ティアソタイによって決議されるべし。オリュントス人ソサンドロスの〔息子〕デメトリオスを、徳とティアソタイのコイノンに対して持ち続けている正義のゆえに讃えて、50ドラクマの奉納物によって栄冠を授けるべし。〈中略〉
ティアソタイは、オリュントス人デメトリオスを〔讃えた³⁵⁾。〕（※この一文は、冠の浮彫で囲まれている。）

このティアソタイでは、少なくとも、キュプロスのサラミスとオリュントスという二つの異なる地域の出身者が一緒に活動をしている。オリュントス人デメトリオスは、ティアソタイから顕彰を受けて冠を授けられるほど積極的に活動をしていたようである。彼の出身地であるオリュントスは前4世紀中葉にマケドニアの手で陥落し亡命者が明らかに生じたポリスであり、亡命者（正確には、その子孫）のアテナイでの活動を考えるうえで非常に興味深い。また、決議を提案したクレオンが政治的に不安定だったキュプロス出身である点も重要である。

次に取り上げるのは、パンクラテスを信奉するエラニスタイという団体の碑文（前300／299年）である。そこには、次のとおり、エラニスタイから顕彰を受けた者たちによる奉納の文言が刻まれている。

ヘゲマコスがアルコンの時の財務役、世話役、書記役は、徳とエラニスタイに対する正義のゆえにエラニスタイによって讃えられたので、パンクラテスに対して奉納を行った。
財務役：ミュス、世話役：ミレトス人ディオニュシドロス、テバイ人エウノストス、ヘラクレイア人デモフィロス、ディオニュシオス、書記役：ヘラクレイア人コノン³⁶⁾。（※以上のメンバーのリスト全体が、冠の浮彫によって囲われている。）

35) *IG II²* 1263.

36) *SEG* 41.171.

この碑文には、おそらくは市民であると思われるミュスという人物に加えて、ミレトス、テバイ、ヘラクレイアという三つの異なる地域の出身者の名前が登場しており、このエラニスタイが非常に国際色豊かな集団であったことがわかる。先ほどのティアソタイの事例と同様に、エラニスタイから顕彰を受けた者たちのうちには、テバイ人やヘラクレイア人という、前4世紀中葉以降に政治的な混乱に伴う亡命が生じた地域の出身者がいる点に注意したい。

以上のように、アテナイを拠点とした外国人は、出身地毎に、そして場合によっては出身地の枠を超える形でコミュニティを結成して活動を行っていた。ここで取り上げた事例は、亡命者の集団としての活動の実態を直接的に示すものではない。だが、これらはすべて政治的な混乱が生じた地域の出身者がかかわるコミュニティである点を踏まえるならば、そこから亡命者集団のアテナイにおける活動の一端を推察することは許されよう。亡命者は、状況によっては出身地にこだわらずにコミュニティを形成し、それをアテナイにおける活動の基盤としていた可能性は十分であろう。

2. 亡命者の個人としての活動

上述のとおり、亡命者は、出身地毎に、また場合によってはその枠組みを超える形でコミュニティ形成し、それも支えとしながら個人としてアテナイで活動をしていた可能性がある。亡命者個人の行動を明確に示す史料はないが、それを推量するうえで興味深い事例はいくつか存在する。

まずは、前4世紀後半に財政改革を主導した市民たるリュクルゴスに注目したい。具体的に彼の活動を検討すると、その背景に政治的混乱が生じた地域出身者の姿が浮かび上がってくる。

第一に注目したいのが、彼の政治上のプレーンである。伝プルタルコス『リュクルゴス伝』によれば、彼が何らかの決議を提案するにあたって助力をしたエウクレイデスなる決議専門家の外国人がおり、彼はオリュントス人であったという³⁷⁾。エウクレイデスは、自らの政治的な専門知識を生かして、アテナイの有力な政治家と結びつきながら社会の中で活動をしていたのである。

第二に、リュクルゴスが実施した公共事業に注目したい。彼は公共建築の再整備を大々的に実施したが、その財源の主な拠り所は富裕者の私財であった。同じく『リュクルゴス伝』によれば、デイニアスという市民に予め接触し、見返りとして顕彰をするという約束をしたうえで、パンアテナイア祭のスタジアムの建設のための土地を寄付させている³⁸⁾。同様の事態は、実際の決議碑文からもうかがえる。以下、その顕彰の一文を取り上げる。

〈前略〉ブタダイ区民リュコフォンの〔息子〕リュクルゴスが提案した。エウデモスは以前にも必要であるならば戦いのために4000ドラクマを気前よく贈ることを約束し、今回もまたスタジアムとパンアテナイア祭の劇場建設（※誤記。正しい表記は、「パンアテナイア祭のスタジアムと劇場の建設」であったと考えられる）のために〔動力源として〕千組の雄牛を贈り、約束通りにパンアテナイア祭の前にこれら全てを贈った。それゆえに民会によって決議されるべし。フィルルゴスの〔息子〕プラタイア人エウデモスを讃えて、アテナイ人の市民団に対するエウノイア（忠誠心）のゆえに、オリーブの冠により栄冠を授けるべし。そして彼とその子孫はアテナイ人

37) [Plut.] *X Orat.* 842C.

38) *Ibid.*, 841E.

市民団の恩恵者のうちに数えられて、彼には土地と家のエンクテシスが有るように。また彼は、アテナイ人と共に従軍し、臨時財産税を支払うべし。評議会の書記はこの決議を刻み、アクロポリスに据えるべし。刻碑のために民会の財務官は〈一部欠損〉ドラクマを決議のための基金から与えるように³⁹⁾。

このように、プラタイア人エウデモスは、パンアテナイア祭のスタジアムや劇場の建設のための膨大な数の雄牛の寄付を実施し、その見返りとしてリュクルゴス自身の提案によって顕彰を受けている。この寄付から顕彰に至る一連のプロセスの背景については、デイニアスの場合と同様に事前の取り決めがあった可能性が十分にある。プラタイア人デイニアスは、自らの富をもとにリュクルゴスと協力関係を築いていたと考えることができよう。

上記の事例に登場する外国人は、それぞれオリュントス、プラタイアと、政治的混乱が生じた地域の出身である。もちろん、両親や祖父母の頃から代々アテナイに住み続けており、エウクレイデスやエウデモス自身が出身地での政治的混乱の結果として亡命してきたわけではない可能性も想定する必要がある。だが同時に、リュクルゴスの活動に登場する二人の外国人の存在は、亡命者が自らの能力や富を元手にしてアテナイでたくましく生きていた可能性も示唆しているのではないだろうか。

続いて、亡命に伴いアテナイから賦与された権利を使ってアテナイでの生活を安定させたと考えられる事例を取り上げる。第1章で述べたように、前427年、スパルタの侵攻により祖国が陥落しアテナイに亡命してきたプラタイア人は市民権を一括付与され、また前373年には、テバイによりボイオティアの地を追放された彼らに対して一括市民権付与の再確認がされている。前370年代までに通婚が禁止される中で、この権利に基づいて市民と婚姻関係を結んでいたことを示唆する墓碑が存在する。以下、当該事例を確認したい。

エライオス区民フィロン。

プラタイア人グラウロスの〔娘〕クリュサリス⁴⁰⁾。

当該墓碑の製作年代は前4世紀後半とされており、そこには、市民とプラタイア人2名の名前が刻まれている。プラタイア人クリュサリスが市民フィロンの妻であったとは明記されていないものの、夫婦関係を表現した浮彫から両者は婚姻関係にあったと推察される⁴¹⁾。

この墓碑は、プラタイア人が自身に与えられた市民権に基づいて市民と婚姻関係を結び生活を安定させたことをうかがわせる事例として、非常に興味深い。前章でも言及したように、オリュントス人やテバイ人に対してアテレイアが付与されるなど、亡命者に対してしばしば様々な特権が付与されていたことが知られているが、個人個人がその権利を得て具体的にどのようにアテナイで生き抜いていたのかについて、文献史料は黙して語らない。しかしながら、市民フィロンとプラタイア人クリュサリスの墓碑は、その実情の一端を垣間見せてくれているのである。

39) *IG II³ 1, 352.9-40.*

40) *ΣΕΜΑ 200.*

41) *CAT 2.386b.*

おわりに

これまで、主に外国人自身の碑文を手がかりとして、前4世紀アテナイ社会における亡命者の実態について考えてきた。その結果をまとめると、次のようになる。

第一に、墓碑に記されたエトニコンの分析を通じ、政治的な混乱に陥った地域の出身者の墓碑について、当該時期以降にアッティカの地で増加しているケースが多数確認された。再三の繰り返しになるが、名前を記された者が亡命者であることが明らかな墓碑は存在しない。この点を踏まえるならば、政治的な混乱が生じた地域の出身者がアテナイに流入していたと述べるにとどまるべきかもしれない。だが、当該地域出身者の墓碑の増加は、各地における政治的な混乱によって生じた亡命者が実際に多数流入した事実を反映している可能性も十分にあることを付言しておきたい。とりわけ、テバイやプラタイア、オリュントスのように祖国が徹底的に破壊を受けたところの出身者については、その可能性が一層高くなるだろう。

第二に、アソシエーション関連の碑文、ポリスの決議碑文や墓碑から、アテナイに流入した当該地域の出身者が様々な手段を用いてアテナイで安定的な生活を送ろうと努めていた姿が、ひとつの可能性として浮かび上がってきた。彼らは、地域毎／地域の枠組みを超えた既存のコミュニティに参加、もしくは新しいコミュニティを形成し、それを一つの足掛かりに社会のなかで活動することが可能であった。また個人の能力・富やアテナイから賦与された特権も、生活を安定させるうえで有効に働いたと考えられる。

もちろん、第二章で取り上げたイソクラテスの手による演説でプラタイア人が語る言葉を踏まえるならば、能力・富や与えられた権利を巧みに扱って十分に安定した生活をアテナイで送ることができた亡命者はそれほど多くなく、大半は困窮していたと考えるべきかもしれない。しかしながら、前者のような亡命者がいた可能性も、亡命者の社会における動向について考えるにあたり見逃してはならないだろう。

本稿の考察はあくまで推測の域を出ないが、アテナイ社会における外国人の動向を理解するうえで、亡命者もまた十分に考慮すべき存在であることは間違いない。そして、本稿で実践したように、亡命者の存在を含めて様々な可能性を考慮し検討を重ねていくことによって、アテナイ社会における外国人の実像により迫ることができるように思われる。

(大阪公立大学大学院文学研究科都市文化研究センター研究員)